

第六号

## 「東西」

メルマガ noichi 第六号は『東西(その一)』。二回シリーズでお届けする一回目の今回は、東洋と西洋に橋を架けます。私たち日本人の生活に西洋文化は欠かせなくなつて久しいですが、明治100年を数える昨今でも、西洋、東洋の根本的な思想、理念は平行線を辿っている懸念を拭い切れません。今回は雅楽之一がヨーロッパ滞在中、ドイツ、ウィーンので夫々親交を深めた盟友のお二人に執筆をお願いしました。お楽しみ頂ければ幸いに存じます。



先日、世界最高のチェリスト、ヨーヨー・マが来日したので、観賞に出掛けて参りました。

両親が中国人のヨーヨー・マは、幼い頃にニューヨークへ移住、メキシコと頭角を表し、デビュー当時の小学生時分から天才と称され、そのパフォーマーは、その時既に完成されていたという話。

来日したヨーヨー・マ。この日は名曲(そして超難曲!) ショスタコヴィッチの協奏曲第一番を演奏するとあつて、場内は業界人、各界の著名人、音楽ファンで超満員。異様な熱気の中を当人は風を切るように颯爽と登場し、持ち前の優しい笑顔で聴衆の歓声に応えると、サツと定位置について、場内はピーンと緊張の糸で張り詰めた。

ヨーヨー・マがヨーヨー・マになる瞬間である。彼が弓を引くと、場内に張り詰めた緊張の糸が振動するような、全てを制圧するような、何か絶対的な力が働いた。それは感動なのか、信仰なのか、全く筆舌に尽くし難い、首(こうべ)を垂れる想いであつた。

ヨーヨー・マは故郷中国は勿論として、アジア音楽・文化に造形が深い。近年、ヨーヨー・マは『シルクロード・プロジェクト』と題し、自らの経験と財産をアジア諸国に還元し、それが徐々にライフワークとなつていくように見受けるのは、ヨーヨー・マの持つ民族への愛と、故郷への感謝からであろう。

サクセスストーリーを真似するのは難しい。そして、特筆しなければならぬのは、彼氏が別次元の『天才』であるということ。しかし、それを踏まえた上である。我々日本人は、彼氏の人生、思想をもっと参考にしなくてはならない。芸術を志す人間は、祖国の文化を無視すると浮き足立つてしまうのは、もはや疑いのない事実なのではないだろうか。

これは音楽家に限つた話ではない。世界の第一線で活躍する日本人が日本文化に敬意を表し、自らも日本文化にたしなむことの大切さに開眼すれば、日本の若者が世界に躍り出る可能性が開けるのではないかと思うし、それが又、唯一のサクセスストーリーへの道すじであると私は信じている。

## 狂言風オペラ

オペラ歌手 豊嶋 起久子

久しぶりの帰国で北九州国際音楽祭に歌手として出演、その後は客として「狂言風オペラ〜Mozart 魔笛〜」を鑑賞した。この狂言風オペラとは文字通り、西洋のオペラと東洋の狂言の合体作品である。台詞がドイツ語から狂言風に書き下ろされた所が劇の大きな鍵になっているのだが、何のご縁かそれは私の芸大時代のドイツ語の恩師・小宮正安氏であった。私自身は能楽の(金剛流シテ方)家に生まれ、女性であった事これ幸い、オペラを学んでヨーロッパで演奏している。

室町に確立された能楽、ルネッサンス末期に生まれたオペラ、東西社会の水面下で下克上が起きていた時代に噴水の如く沸き上がった。特に「狂言」と「喜劇オペラ」の担った役割は、東西の人間社会の中で「笑い」の必然性、そして社会のひずみを笑いとして昇華させる内なる戦いではなかっただろうか。勿論それだけではないが、歴史の流れの一部を見てもこの狂言とふんだんに喜劇的な歌芝居をかねた傑作の魔笛がマッチしないわけがない。

特筆すべき背景は、狂言と喜劇オペラが両者とも幕間劇として生まれた点である。能楽ではゆつくりと深みのある精神性と集中力で幽玄を魅せる能と能の間に狂言を置き、双方の良さを相乗させた。オペラでは神々や英雄が登場する荘重なオペラの休憩中に喜劇オペラを魅せ、かえってそちらの方が人気を呼んで単独のジャンルとなつて行つた。

この作品の狂言を演ずるのは京都の茂山一門。「お豆腐狂言」をモットーとし、その言葉の如く柔らかい日常的な狂言を伝えてくれる。彼らは狂言の伝統をしかと守りながらも、それを狭い中に閉じ込めない。

Mozartという作曲家の性質を見たときにも、いわゆる狂言的性格が譜面からも手紙からも読み取れる。そして彼の

作品の品格、これらの要素も私の中で狂言というものと容易に合体する事が可能だった。この狂言風オペラとの出会いは、魔笛という作品の持つ「作品の格」と能楽のもつそれらが東西の距離を無きものとし、空間を容易に超えることを可能とし、現代の新たな笑いを、天上の天女から聞き出したような、舞台上に舞い降りたような、そんな不思議な瞬間であった。



## 過去へのあこがれ

指揮者・ヴァイオリニスト 阿部真也

東洋人が西洋の文化に憧れを抱いてから数百年、我々が生きるこの日本で如何に発展を遂げているのだろうか。私は幼少より日本文化をたしなみ、同時に西洋音楽の教育も受けた。技を習得する過程には共通点がある、それは「稽古」であり「Practice (プラクティス・練習)」である。きれいな字が書ける様になりたい、美味しいお茶を点てられる様になりたい、美しい花を生けられる様になりたい、美しい曲を演奏出来る様になりたい、その思いがあるからこそ精進してこられたし、これからも続けていける。

私は今、日本人でありながらドイツに住み、西洋音楽を

奏でる一人の演奏家として生きている。日本にずっと居ないのには理由がある。それはドイツに「あこがれ」があるからである。もちろん「あこがれ」は日本にも存在するのであるが、その「あこがれ」が「未来」に対してばかり向いている様に感じる。しかしヨーロッパには未来に対してのそれと同じくらい「過去」に対してもある様に感じるのである。西洋では、古い街並みが大切にされ、更に修復をし、古いものが美しく生まれ変わる。ただし生まれ変わると言っても種類が違う。日本には今でも古い町並みが残っている所もあり、それはそれで美しいのであるが、発展の意味、精神がそこには無い。日本はどうしても「便利」「最新」という概念が支配している様な気さえするが、ヨーロッパではそれが上手く共存している様に思う。「過去があつたから今が存在し、残ってきたものは美しいが故に人々が伝えてきた」という思いが確実に人々の血にあるのだと感ずる。だからといって便利なものを取り入れないわけではない。ヨーロッパ人は分かっているのだ、「自分がこれ以上は望む必要がない」という点を。それは「過去へのあこがれ」があるからだと思ふ。

自分が幼き頃、稽古を積む自分の憧れは「上達している自分」であった。そこには「過去」は共存していなかった。しかし今、自分が過去に創られた最高の美を表現する演奏家として「過去へのあこがれ」をもつて精進したい。

日本は世界でも類を見ない程の色彩を持ち、美を持ち合わせていることを、私は誇りに思う。それは全て先人達が創り成したものである。日本の先人達が遺した書物や芸術は、西洋のそれと比しても遜色がないのである。

己を知り、未来に憧れを持ち、期待し、過去にも憧れを持つていた。

そんな時代があった。

そんな日本に、東洋にしたい。

## TNBのそれっぽい話4

三味線演奏家 (<http://ameblo.jp/amb-zz/>) 田辺 明

日常生活において何の気なしに聞こえてくる音や音楽に気を留めてみると、音楽的・楽典的にさまざまな発見があったり(なかつたり)します。

よく忙しく走り回ることを東奔西走、南船北馬なんて四字熟語で言います。南船北馬は中国において南は河が多く、北は山が多いという地形からきています。漢字での言葉というのはやはり中国が語源であることが多いですね。東洋・西洋というのは中国からみて東(要するに日本)、西ということですが。

音楽では日本と西洋を比べると楽譜が全然違います。すべてがそうとは限りませんが、邦楽の縦譜と西洋の五線譜。これって不思議と文章を書くときと同じ向きなんですよね。日本人は上から下に文字を書いて左に改行、西洋では左から右に書いて下に改行。

でも、楽譜というものは一緒に、

よく洋楽の方が邦楽縦譜を初めて見て「漢字ばかりで訳がわからない!」なんて言いますけど、特に正派式は連桁(8分音符や16分音符を表す線)や付点(縦に付いただけの話で非常に合理的な楽譜になっている)と思えます。

あとは音符が絃名譜(奏法譜・*tablature* 要するに「音」ではなくて弾く絃や押さえるポジションで表記)になっているので、これは「TAB譜になっているだけだから」とか言うとなんか面白くなると思います。音楽のシルクロードを東奔西走するのは大変です。



## 唯是震一 作品演奏会 — 協奏曲の夕べ —

とき 平成23年12月6日(火)より7時開演  
ところ 渋谷区文化総合センター大和田さくらホール

- ・箏協奏曲第二番
- ・箏と三弦独奏と管弦の為の協奏曲第十番
- ・十七弦と箏群の為の協奏曲第四番
- ・尺八と箏の為の協奏曲第三番

出演 山本邦山(人間国宝) 奥田雅楽之一  
砂崎知子 都山流邦山会  
大久保雅礼 正派合奏団  
高畑雅紫登  
中島一子

一人でも多くの方に聴いて頂きたいと思っております。チケットのお問い合わせはメルマガ編集部まで!

邦楽英単語講座・その五：暗譜

## Memorization of notes



Translated by noriko morikawa  
Illustration : urara okuda

### ◎あともがき◎

「日本には二つの文化がある。仏教的なものと神道的なもの。そして世の中のモダンなものは神道に向かっている」と言っていたのはイタリアのカルロ・スカルパという建築家。実際、ミース・ファン・デル・ローエの代表作でもあるフアンズワース邸などは桂離宮にそっくりだ。

二つの文化は建築で言う日光東照宮と龍安寺。足し算と引き算、縄文と弥生と言ってもいい。大陸的、装飾的な仏教文化は西洋に通じる部分もあり、禅的、神道的な文化こそが日本の本来の姿と考えられている。しかし日本文化はミニマルな「わびさび」だけではない。桂離宮もシンプルでモダンなだけではない。自然や遊び、時間感覚があつて、現代のモダンな建築より五百年は先を行っている。日本人はいまだに西洋にあこがれている。その西洋が目指す先には東洋や日本があるのに、当の日本人自身が一番そこに気がついていないのかもしれない。

グラフィックデザイナー (<http://www.1938.jp>) みやはらたかお